

琉球エアークommunicuter

# 貨物室を拡大した 地元待望の航空機を導入！

琉球エアークommunicuterは  
創立30周年

琉球エアークommunicuter(RAC)は、沖縄地域の大きささまざまな離島の大切な足として、2015年12月24日、創立30周年を迎えました。

RACが地元の自治体や地場の企業などの共同出資によって生まれたのは、1985年のこと。翌1986年には必要な免許を取得し、1987年2月に那覇⇨慶良間線で運航を開始しました。当初は、9名乗りのBN12B型機でのフライトでした。

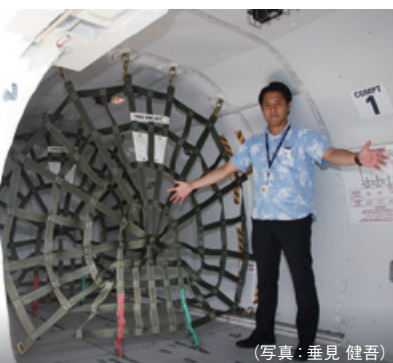
その後、徐々に運航路線を拡大し、沖縄本島を中心に離島間を広い範囲でつなぐエアラインへと成長しました。現在では39名乗りのDH C-181100型機4機と50名乗りのDH C-181300型機1機の合計5機により、南・北大東島や与那国島、久米島、多良間島など沖縄圏域12路線を結び、1日約41便を運航しています。



世界で初めての機体

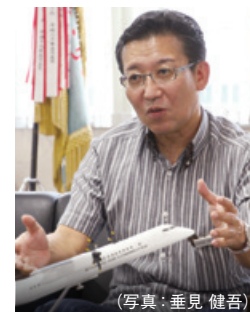
2016年4月、このRACに待望の新型機が就航します。その名も「Q400カーゴ・コンピ」。実は、この機体は「世界初」なのです。

正式名称はボンバルディアDH C-181400型機カーゴ・コンピ仕様。その最大の特徴は、標準仕様では74席ある客席を50席に抑え、ゆったりとお座りいただけるよう座席間隔を広げるとともに、機体後方の貨物室を拡大した点です。貨物室の広さは従来機の2.5倍。新しい航空機の就航は、人々の移動の足としてはもちろん、地場産業の



(写真：垂見 健吾)

貨物室が2.5倍に。体長が数メートルあるカジキも丸ごと運べます。



(写真：垂見 健吾)

琉球エアークommunicuter  
代表取締役社長  
伊礼 恭

成長のための貨物輸送力を拡充することも目的としています。例えば与那国島で水揚げされる大型のカジキや日本一の生産量を誇る久米島のクルマエビ、北大東島で豊富に水揚げされるマグロやサワラ、北大東島でのアワビなどの海産物資源を、迅速かつ大量に運べるようになります。また、自転車なども積めるようになるので、離島でのトライアスロンといったイベントの開

催につながるかもしれません。貨物室を大きくとったこの仕様は世界初。沖縄の離島事情に合わせてカスタマイズした航空機なのです。

島をつないで

沖縄の経済発展に貢献

RAC社長の伊礼恭は「2017年度末までに現有の5機すべてをこのQ400カーゴ・コンピに更新する予定で、旅客・貨物ともに輸送力のアップを図っていきます」と語ります。

RACはこれからも離島の皆さまの利便性を第一に、多くの島からなる沖縄の観光振興、経済発展に貢献できる航空会社を目指します。

クルマエビが特産物である  
久米島漁業協同組合から

これまでは本土出荷のピーク時期(12月~1月)であっても、航空機の貨物搭載量が限られていたため4社のクルマエビ生産事業者で生産調整を行っていましたが、これが解消されます。また近い将来、きれいで水温や水質が安定しており、栄養にも富んだ海洋深層水を使う量を10倍にする計画もあります。その際は生産量を増やすことも考えているので、今後の輸送力拡大に期待しています。



久米島漁業協同組合  
参事 宮里 真次さま

アワビの養殖事業に取り組んでいる  
北大東村から

北大東村では、夏の台風や冬の季節風などの影響で、海上で水産物を育てる方法では安定供給ができないため、陸上養殖に取り組んでいます。特にアワビでは輸送力が大きな課題でしたが、航空機の大型化による航空貨物輸送力のアップは、地元にとっても大変ありがたいです。



北大東島研究所  
所長 中島 英太郎さま